

約束げんまん

～子どもを犯罪から守るために～

沖縄県警察本部

子ども達が犯罪の被害に遭わないように紙芝居をつくりました。

やくそく
げんまん





雨上がりの森、木々の間から太陽が顔を出した。
葉っぱの陰に隠れていた虫たちが、もぞもぞと動き出した。

「晴れたよ」

テントウムシのよっちゃんが、羽についた水滴を飛ばしながら言った。

「あ～あ、たいくつだった」

バッタのあっちゃんが、手足を伸ばしながら答えた。





「遅くなったから、近道して帰ろうよ」
あっちゃんが、葉っぱがたくさん重なったトンネルの
方向を指さした。

「だめだよ、あそこは変な虫が出るかもしれないから」
よっちゃんが言った。

「変な虫は、怖い顔をしているからすぐわかるよ」
あっちゃんが言うと、

「うん、見つけたら逃げればいいんだよね」
よっちゃんが答えた。





2匹は、暗い葉っぱのトンネルの中に入っていった。

「なんかじめじめして気持ちが悪いね」
よっちゃんが、周りを見ながら言った。

「あれ、出口がわからなくなっちゃった」
あっちゃんがキョロキョロしながら言った。





その時、葉っぱの陰から、カマキリのお兄さんが顔を出した。

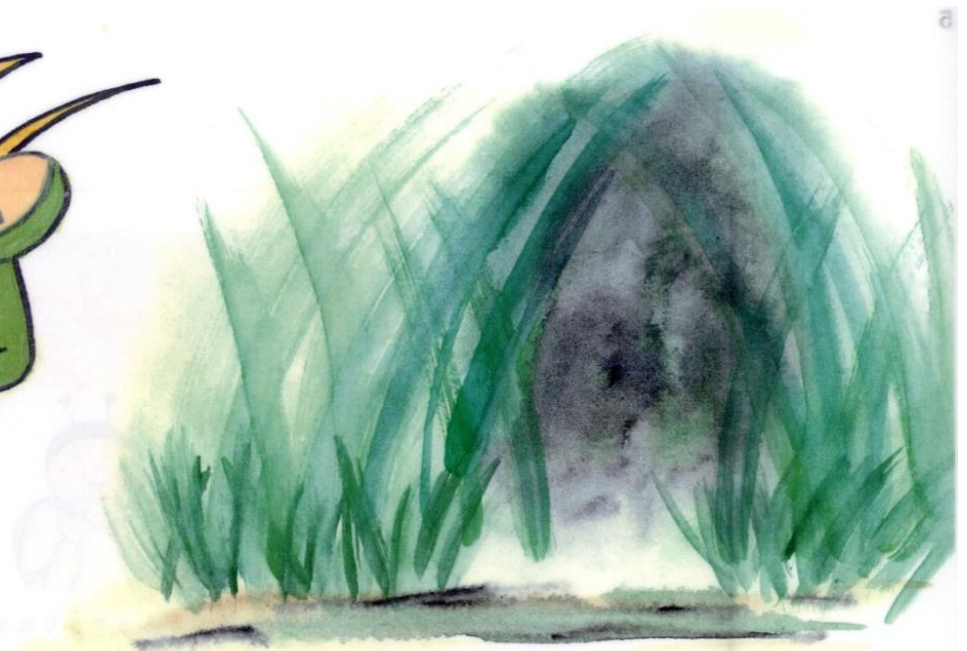
「おや、テントウムシとバッタの子どもだね」
「迷子になったのかい、お兄さんが出口へ案内してあげるよ」と優しい声で言った。

「どうする？」 よっちゃんが小さな声で聞いた。

「優しそうな虫だから大丈夫だよ、ついて行けば早く帰れるよ」 あっちゃんが言った。

「でも、知らない虫にはついて行ってはいけないってお母さんが言ってたよ」 よっちゃんが心配そうに言った。

「よっちゃんは臆病だな、ぼく一人で行くよ」
あっちゃんが言った。





「近道を教えてください」

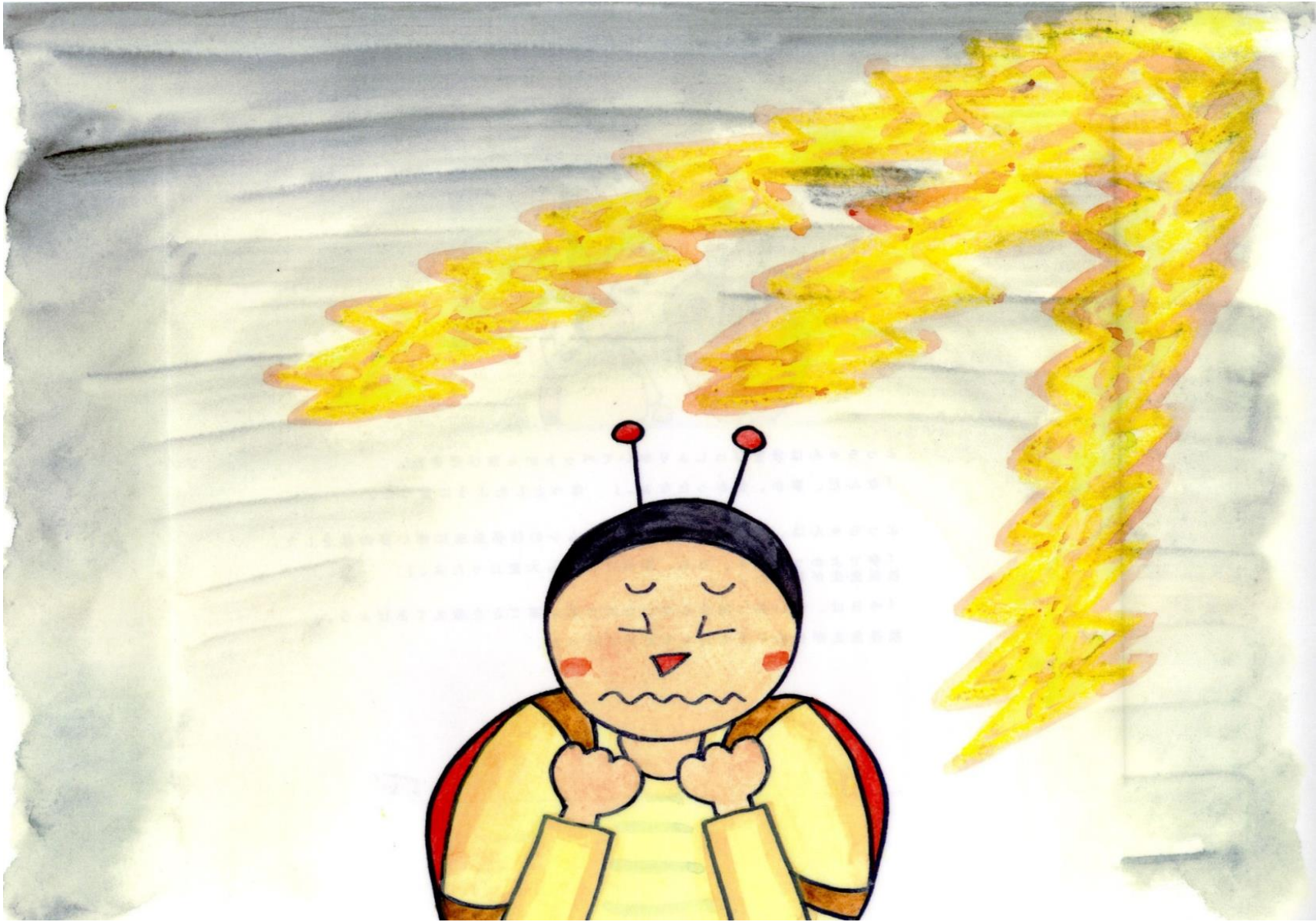
あっちゃんがカマキリのお兄さんをお願いした。

「お兄さんの背中に乗ってもいいよ」とカマキリがぐるりと背中を見せた。

あっちゃんが背中に上がると、カマキリが優しい声で言った。

「こっちのトンネルが近道だよ」

あっちゃんを乗せたカマキリはトンネルの奥の方へ消えてしまった。





「大丈夫かな、心配だな」
よっちゃんは不安そうに見送った。

すると、トンネルの中からカマキリの大きな声が聞こえてきた。

「おいしそうなバッタだな、食べちゃうぞ～」

「助けて～、食べられちゃうよ～」
あっちゃんの鳴き声が響いた。





「助けて～」よっちゃんは汗をびっしょりかいてベッドから飛び起きた。

「なんだ、夢か、恐かったな」ほっとしたように言った。

「きょうは、怖い虫に捕まらないための約束事を教えてあげよう」校長先生が、虫の子ども達を集めて言った。

よっちゃんは、次の朝、学校でカブトムシの校長先生に怖い夢の話をした。

「夢でよかったね、でも、ほんとうだったら大変だったよ」校長先生が言った。





「一つめの約束は、誰でも入りやすく、周りから見えにくいところには行かないこと」

「二つめの約束は、知らない虫にはついて行かないこと」

「三つ目の約束は、学校の行き帰りや遊ぶ時には、絶対に一匹だけにはならないこと」

「わかったかな、この三つの約束を守れるかな」
校長先生がみんなの顔を見ながら言った。

「はあ〜い」
虫たちが大きな声で返事をした。



おはようございます

こんにちは

さようなら *





「それから、もう一つの約束、誰にでもちゃんとあいさつすること」

「あいさつすると、大人の虫たちが君たちを守ってくれるよ」

校長先生が優しい顔で言った。

「はあ〜い」

虫たちがまた大きな声で返事した。





よっちゃんは、あっちゃんにタベ見た夢の話をした。

「トンネルは、誰でも入れるけど、暗くて周りから見えないんだ」

「カマキリは、はじめは優しくかったから、悪い虫には見えなかったんだ」

「あっちゃんは一人でついて行ったから、危ない目にあったんだ」

「ちゃんと、校長先生との約束を守ろうね」
よっちゃんとあっちゃんが言った。





学校の帰り道、よっちゃんとあっちゃんは明るい葉っぱの上を通った。

そこには、花の蜜を吸っている大人のミツバチやチョウチョたちがたくさんいた。

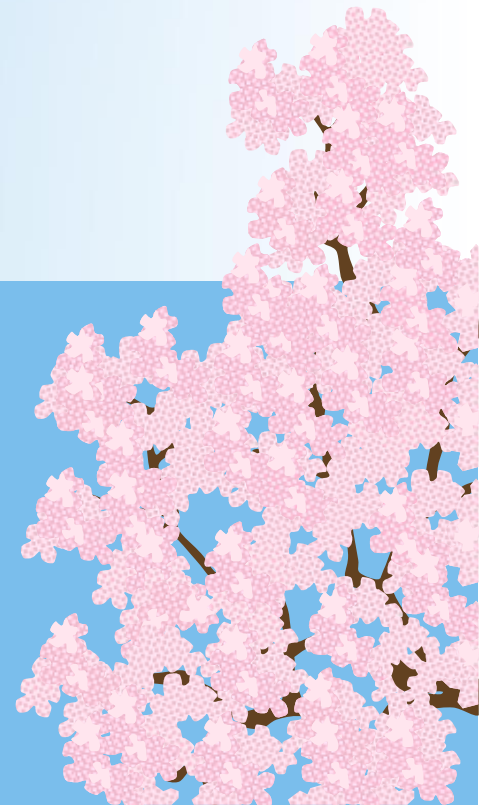
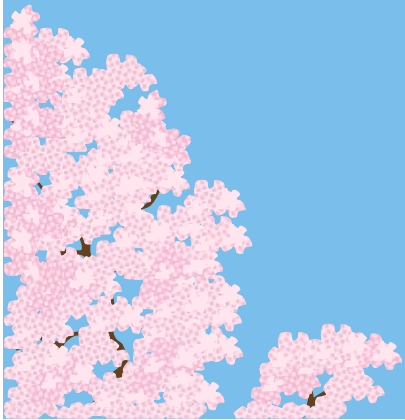
「こんにちは」

よっちゃんとあっちゃんは大きな声であいさつした。

「こんにちは、気をつけて」

大人の虫たちが声をかけた。

おわり



3つの約束を守ろうね！

- ① 入りやすく見えにくいところには行かないこと
- ② 知らない人にはついて行かないこと
- ③ 一人で行動しないこと